

# ニュース記事における連体修飾節の談話機能と意味構成について<sup>1</sup>

—選択体系機能言語学の視点から—

Discourse Function and Semantic Construction of Adnominal Clauses  
in News Articles —From the Viewpoint of Systemic Functional Linguistics—

付 改 華 謝 冬  
Fu Gaihua and XIE Dong

The multiple adnominal structures in Japanese news articles are extremely prominent. The researches mostly discuss the structural and semantic characteristics of the division of adnominal clauses into “internal relationship” and “external relationship”. This paper discusses the discourse functions and semantic interaction structure relationship from the perspective of Systemic Function Linguistics. It is clarified that Japanese adnominal clauses can be regarded as grammatical metaphorical operations formed by transitivity transfer, and by transforming dynamic events into static attributes, the information is contextualized and the information structure is adjusted. In addition, after the subject noun acquires the static attributes, it participates in other transitivity as a participant, forming some semantic interactions as enhancement, or elaboration, or extension, which strengthen the author's organizational purpose and thus affecting the reader's cognition.

キーワード： ニュース記事 連体修飾節 談話機能 意味構成

## 0. はじめに

日本の新聞記事は多重的な節複合が顕著である。次の例を見てみよう。(便宜上、対象となる連体修飾節を〔 〕で括り、すぐ後に来る名詞を主名詞と呼び、黒字と下線で示す。なお、複数の連体節がある場合は、①、②、③で示す)。

(1) 〔①世界でも速いペースで新型コロナウイルスのワクチン接種を進める〕 **UAE=アラブ首長国連邦**は、〔②〔③中国の製薬会社が開発した〕 **ワクチン**を国内で大量に生産する〕 **こと**になりました。

以上は2021年3月29日17時53分NHKが報道したニュース記事<sup>2</sup>から取った例文である。

例文には、性質が多少異なる<sup>3</sup>が、いわゆる連体修飾節が3か所も数えられ、互いに相互作用して一つの文の形で事象を表現している。実は、この記事は、合計533文字で、文の数はわずか6であるが、節は32もある。そのうち、連体修飾節が16もあり、全体の31.25%も占めている。連体修飾節が多用されることが特徴であると言えよう。

新聞記事だけでなく、連体修飾節の多用は現代日本語の様々な場面でも顕著であり、構造的、意味的など様々な面で盛んに議論されている。特に「内の関係」と「外の関係」と二分してそれぞれの構造的・意味的特性を解明する研究は示唆的である。しかし、連体修飾節がなぜ多用されているのか、どのような談話機能を果たしているのか、どのように主節および談話全体と相互作用してどのような談話を構築しているのかなど未明な点が多数残されている。本稿では、連体修飾節が顕著に多用されるニュース記事のテキストを対象に、選択体系機能理論の視点からそれぞれの問題を検討する。

## 1. 先行研究

現代日本語の連体修飾節について、さまざまな面で検討が行われている。広く知られているのは、意味的、統語的側面の両面にわたる奥津(1974)と寺村(1975-1978)の研究である。奥津(1974)は、現代日本語の連体修飾を「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」に分けているが、これは寺村(1975-1978)が提唱した「内の関係」と「外の関係」にあたりと考えられる。ここでいう「外の関係」では、修飾部は底の名詞(本稿では主名詞と呼ぶ)の内容を表す、または少なくともその内容にかかわる「内容補充的」であるのに対し、「内の関係」では、修飾部は、底の名詞を「特定」するには違いないが、その内容にはかかわらない「付加的」なものであると考えられている。

以上のような分類は広く受け継がれているが、異なる立場の研究も見られる。高橋(1979)は、動詞句と名詞の「かかわり」により、連体修飾を「関係づけのかかわり」、「属性づけのかかわり」、「内容づけのかかわり」、「特殊化のかかわり」、「具体化のかかわり」という5つにわけている。伊土(2007)は、体系化を目的にして、「関係節」、「属性節」、「同格節」、「部分節」、「相対節」、「継起節」という六分類を提案している。

一方、大島(2010)は、奥津(1974)、寺村(1975-1978)による「内の関係」、「外の関係」連体構造の二分法を検証した上、連体修飾の可否および節に入る助詞など統語的検討を行っている。また、意味的機能として「属性限定」と「集合限定」を提唱している。さらに、従来「内容補充の関係」或いは「同格連体名詞構造」と呼ばれてきたものにかかわる「という」の介在、「こと」、「の」の特徴などを考察している。

ほかには、連体節のテンス、アスペクトを扱う研究(井島2021、張2019、世良2020など)や、教育現場への応用研究(中須2003)、日中、日英対照研究や翻訳研究(八木2016、2017、谷2019、徐2021など)も盛んになっている。以上の先行研究を通して、現代日本語における

連体修飾節の性質はある程度明らかになった。しかしながら、談話構成上、連体修飾節多用の原因は何か、連体節と主節および談話全体との相互作用の有様はまだ不明瞭である。本稿では、談話類型をニュース記事に限定し、選択体系機能理論の枠組みでそれらの問題を解明することを試みる。

## 2. 研究立場

本稿では、選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics、以下 SFL) で提案している層間文法的メタファーと観念構成的機能の枠組みで日本語の連体修飾節の談話機能と意味構成を検討する。

選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics、以下 SFL) は、ロンドン言語学派の M.A.K.Halliday を中心に発展した言語理論であり、言語を対人的相互作用を実現するための体系的システムとみなす。SFL では、多種多様な意味を作り出す仕組みで最も重要なものは、層化とメタ機能化であるとされている。社会的人間の言語システムは、意味体系の層、語彙一文法体系の層、音韻音声／初期体系の層の3つの層に分化している。そのうち、意味層と語彙一文法層に属する選択体系は、各々別個に意味を作り出すし、それらが相互作用することで複合的な意味を作り出すのであり、いわゆる層間の文法的メタファーが成り立つ ((山口 2000 : 15-18)。

メタ機能とは、言語の社会的人間活動における機能のことであり、観念構成的機能、対人的機能、テキスト形成的機能という3つが挙げられている。観念構成的機能は、下位区分として、物質的には連続的な心的外的経験事象を記号化する経験構成的機能と複数の同一レベルの構成単位を論理的修辭的に関連する論理構成的機能に分かれる。経験構成的機能の意味層に属する選択体系網で代表的なのは、いわゆる過程構成選択体系網である。過程構成は、人間が経験するさまざまな事象を、過剰中核部、参与要素、状況要素という3つの要素の組み合わせとしてとらえ、その型には、事物・事象の動的な出来事や変化や行動を記号化する物質過程、物質過程と心理過程の中間に位置し、外部から観察可能な身体生理的活動をとらえる行動過程、事物・事象に対する知覚や感情や認知をとらえる心理過程、事物・事象についての人の発言をそのまま或いは発言内容の主旨を伝える発言過程、2つの事物・事象の一方を他方のクラスに所属させたり、一方を他方で同定したりする関係過程、事物・事象の存在を示す存在過程という6つがある (山口 2000 : 19-20)。

このような類型化によって、同一事象或いは同一のコンテキストを異なる類型で言語化する可能性が示された一方、話し手或いは作者が意図的に構築してきた考え方が具現され、言語分析によって話し手或いは作者の考えがいかに組織化していくことかを分析することも可能になる。

### 3. 連体修飾節の談話機能と意味構成について

#### 3.1 連体修飾節と文法的メタファー

SFL では、語彙文法層で選択された意味のしかたがその上位の意味層での選択と一致しない場合を文法的メタファーという。本稿では、基本的に奥津、寺村、大島に従い、連体修飾節を「内の関係」或いは「外の関係」で主名詞と関係づけると考えるが、このような構造的・意味的解明を機能的に再検討すると、経験構成的に選択可能な各々の過程構造が、意図的な文保医的メタファー操作によって関係づけの連体節になるのではないかと考えられる。つまり、連体修飾節は、文法的メタファーの典型である名詞化の似たようなメカニズムで構成され、他の節と相互作用して、ある事象を構築するような過程構成にかかわる観念構成的メタファーのように考えられる。例(1)を再掲する。

(1) [①世界でも速いペースで新型コロナウイルスのワクチン接種を進める] UAE=アラブ首長国連邦は、[② [③中国の製薬会社が開発した] ワクチンを国内で大量に生産する] ことになりました。

例(1)には、連体修飾節が3箇所ある。寺村(1975-1978)の説に従えば、①はいわゆる「内の関係」かつ「非制限的用法」で、③は「内の関係」で「制限的用法」の用例であるが、②は「コト型補文」として「外の関係」の連体修飾節に関連付けられる。いずれにしろ、節と主名詞の間にはある種の関係づけが成り立つ。①では、連体節が主名詞の「UAE=アラブ首長国連邦」を限定するのではなく、情報付加の機能を果たしている。③では、連体節が主名詞「ワクチン」の集合を限定するものになる。②では「～ことになる」の構造で、「ある事象のあらましを導く(大島 2010: 278)」<sup>4</sup>のである。

では、SFLの枠組みで、①と③の過程構成を考えてみよう。②の「～こと」構造は性質が多少異なるので、次節で検討する。①と③はそれぞれ動詞句「ワクチン接種を進める」、「開発した」が述語になり、いずれも物質過程であることがわかる。主名詞「UAE=アラブ首長国連邦」、「ワクチン」はそれぞれの節で「動作者」と「目標」として機能しているが、修飾・被修飾という階層下降の操作により、物質過程としての動作性が弱まり、主名詞に関連する情報として付加されるようになる。SFLでは、「2つの事物、事象の一方を他方のクラスに所属させたり、一方を他方で同定したりする(山口 2010: 20)」過程は関係過程として認定しているとされるので、連体修飾構造は、むしろ物質過程から関係過程への転移でなされた文法的メタファーの一例ではないだろうかと考えられる<sup>5</sup>。このようなメタファー操作により、名詞化と同じような効果が得られ、つまり、「動作主(所有格による表示の場合を除いて)やダイクシスを失う代わりに、客観性、一般性、反論不可能性を獲得し、さらに別種のプロセスの参与要素になることによって、節の主題(Theme)や焦点(Focus)になる可能性を獲得するのである(福田 2002:

50)」。

紙面の関係で、ニュース記事では報道の文字数が制限されている。連体修飾構造の操作によって、より多くの情報が伝わる一方、背景情報か、前景情報かを巧みに組織化させることも実現でき、報道者の意図もある程度具現されるのである。関係過程は事物・事象間の関係を記述し、静的な属性或いは同定関係を強調するものである。このような静的性質は、物質過程の動的特徴を弱め、主名詞の静的属性を強化するとともに、報道の客観性を高めた効果がある。一方、情報を背景化することにより、報道者と読者の間に共通のコンテキストが構築され、読者が無意識のうちに報道者が伝えようとする情報や意図を納得することになるのである。

### 3.2 「～（という）こと」と事実構成

本稿で調査した記事テキストでは、「～（という）こと」構造も頻繁に見られる。上述の例 (1) のほかに、次のような例も観察された。

(2) UAE のアブドラ外相は 28 日、中東を歴訪している中国の王毅外相と会談し、〔新型コロナウイルスの感染対策で一層協力していく〕 こと で一致しました。

(3) UAE 政府によりますと、〔①両政府は〔②中国の国有の製薬会社「シノファーム」が開発したワクチンを UAE 国内で生産する〕 こと を確認した〕 ということ です。

前節で提案した文法的メタファーの説明は「～（という）こと」にも適用できると考えられる。ただし、「内の関係」と異なり、「コト型補文」は、「外の関係」の連体修飾節に関連付けるとされ、動的事象を静的な事実構成として記述し、物質過程から事実属性を与える関係過程への転移、そして、文として表せるはずの事象が節で記述されるという階層下降の操作により文法的メタファーが成り立つ。これは普通の連体修飾節と同じく、客観性、一般性を強化する一策略であるが、事象の動的特徴を弱め、属性情報を背景化させるほかに、事実構成的機能が捉えられる。

実は、事実構成的機能という概念そのものではないが、「～（という）こと」の事実構成について言及した研究者がいる。砂川由里子 (1988 : 20) は、「「～こと」の句はそれが含まれる文全体の話し手が体験した出来事を自らの中で対象化し、概念的に再構成した内容を表すものである」と述べている。大島資生 (2010 : 277) は、「「こと」はある事象の事実関係を抽出機能をもっていると考えるのである。…事象のあらまはは当該の事象の見た通りの記述ではなく、その事象についての分析・判断の結果として得られるものである」としている。即ち、「～（という）こと」には、話し手或いは作者のある事象を事実としてとらえるという主観的把握が見られる。ただし、「～だろう」や「～に違いない」などのモダリティ表現と異なり、事象を事実

として客観化させて伝えることにより、事象への解釈権を獲得しようとする主観的意図のことである。以上の例では、(1)は「～ことになりました」、(2)は「～ことで一致しました」、(3)は「～ことを確認した」、「～によりますと、～ということです」の構造で、判断や断定、評価を表し、報道者の事件に対する権威的解釈を成す。

新聞記事では、ある事象への報道は、報道機構の社会的認識による報道価値の理解に基づくものである。「～(という)こと」が多用されること自体は、むしろ報道機構による事実構成の策略の一つで、それにより自身の権威的立場を構築、維持するとともに、客観性が強化され、読者の認識形成を促す効果が見られると言えよう。

### 3.3 節複合による意味構成

主名詞は連体修飾構造によりある程度の静的性質を獲得した後、他の過程構成と相互作用して、経験構成的および論理構成的に強化し合い、談話の意味がなされる。例(1)は次のような相互作用関係をなすと考えられる(連体節・主名詞構造は{ }で示し、①、②、③…で番号をつける)。

(4) {{{世界でも早いペースで新型コロナウイルスのワクチン接種を進める UAE=アラブ首長国連邦①} は、{中国の製薬会社が開発したワクチン②} を国内で大量に生産すること③} になりました④}。

①では、主名詞 UAE が関係過程における体現者として、静的属性を獲得しているが、同時に物質過程「ワクチン接種を進める」の動作者として働く性質が保留されるにとどまらず、③の物質過程「生産する」の動作者としても働いている。さらに、この二過程の状況要素、すなわち①で現れた空間と方式状況「世界でも早いペースで」と③の「国内で大量に」が互いに因果関係を成し、観念構成的に意味構成を増強し合う一方、テキスト形式的に結束性が強化されることになる。

同じように、②では、主名詞「ワクチン」が属性の体現者であるが、目標として物質過程「開発した」と③の物質過程「生産する」に関与し、「ワクチン」が従属的な参与要素として増強される。一方、「中国の製薬会社」は物質過程の動作者として働くが、物質過程から関係過程への転移の中、その動的特徴が弱まり、さらに③の「～こと」構文で事実の一環として組織化され、④の客観的判断結果を表す「～ことになる」構文で記述される。このように厳密な節複合の相互作用により、事象のどの部分が強化され、どの部分が弱化されるのか、報道者がどのように事象を言語化するのかなど、論理的な意味構成がなされると言えよう。本稿で考察したこの報道では、UAE を話題中心にして事象を言語化する意図が明らかであることは、さらに次のような情報源に言及する表現「UAE 政府によりますと」、「UAE 側の企業によりますと」にも強化さ

れていると考えられる。

(5) UAE 政府によりますと、両政府は中国の国有の製薬会社「シノファーム」が開発したワクチンを UAE 国内で生産することを確認したということです。

(6) 両政府は生産計画の詳細を明らかにしていませんが、製造に関わる UAE 側の企業によりますと、この企業とシノファームが設立した合弁企業のもとで、すでにワクチンの製造を始めていて、年内に新たな工場を稼働させ、年間 2 億回分を生産する予定だということです。

また、報道の最後、次のような表現がある。

(7) UAE としては中東、湾岸への経済進出を進める中国から協力を得て、国内向けワクチンの供給を強化するとともに、ほかの国にも輸出することで存在感を高めるねらいがあるとみられます。

立場を表す「～としては」によって、UAE が優勢的な報道主体であることが一層明らかになる。同時に、最後に心理過程を表す「～とみる」の受け身形式「～とみられます」が使われるが、報道者の判断（つまり「UAE としては～存在感を高めるねらいがある」）が根拠のある客観的なものであると意図することが捉えられる。

#### 4. おわりに

以上、本稿では、選択体系機能理論の枠組みでニュース記事における連体修飾節の談話機能及び他の節や文とどのように相互作用して意味構成を促すかを検討した。結論として、次のことがわかった。

まず、過程構成の面から見ると、連体修飾節は主名詞に属性を付加する関係過程として機能し、他の過程構成からの文法的メタファー操作によるものであるように考えられる。このような操作で、元の過程構成の動的特徴が弱まり、静的な属性或いは同定関係が強化され、連体修飾節にある情報が背景化される。つまり、報道者と読者の間に共通の背景的コンテキストが構築され、効率よく情報や意図を伝達することが実現されることになるのである。

次に、「～（という）こと」は客観性、一般性を強化する一策略であるが、事象の動的特徴を弱め、属性情報を背景化させるほかに、報道機構による事実構成の策略でもあり、それにより機構自身の権威的立場を構築、維持する一方で、客観性が強化され、読者の認識形成を促すと考えられる。

最後に、文法的メタファー操作により、連体修飾節は静的性質を獲得した後、他の過程構成

と相互作用して、厳密な節複合構造で事象のどの部分が強化され、どの部分が弱化されるのか、報道者がどのように事象を言語化するのかなど、報道者による組織化された論理的な意味構成がなされるのである。

しかしながら、本稿では、まとまった文章の意味構成を検討するため、1つのテキストを中心に検討してきたが、同一の事象を報道する際、報道機構の間で何らかの共通性が見られるか、報道の客観性にどのような影響を与えるかなどはさらなる検討が必要である。

#### 〈注〉

1. 本稿は「江蘇省社会科学基金研究プロジェクト：日本主流媒体涉苏报道的批评话语分析 (21YYD002)」、「教育部人文社会科学研究青年基金研究プロジェクト：评价理论视域下的日本大型社交网站 (2015-2017) 之中国形象研究 (18YJCZH200)」のもとで行われた研究成果の一部である。
2. 出所は <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210329/k10012942621000.html> である。本文に採用した例文はすべて同じ出所である。
3. 大島資生 (2010) では、「～こと」、「～の」によって文中に取り入れられた節を「補文」と呼び、それぞれを外の関係の連体修飾節構造の主名詞が欠く形式にあたと考えられている。本稿では、大島資生 (2010) に従い、「～こと」を連体修飾節構造と考える。
4. 3.2 節でも言及するが、大島 (2010 : 278) は「～こと」構造を「～こと」補文として扱い、「「こと」は「ある事象のあらましを導く」という機能を持つと考えられる」と述べている。
5. 連体修飾構造は関係過程への転移であるという発想は管見の限り、今までの研究では見られていないが、龍城 (2008)、福田 (2010) などは日英語の過程型について対照研究を行い、日本語の過程型を再検討した結果から見ると、過程型の認定は文構造より意味構造の面で行った方が妥当であることがわかった。本稿では、連体修飾節は主名詞に何等かの属性あるいは同定に関係づけるという観点から、関係過程になっていると認定する。

#### 参考文献

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論—名詞句の構造』 東京：大修館書店。
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味 (1) - (4)」『日本語・日本文化』 (4-7), 大阪外国語大学留学生別科。(寺村秀夫 (1992) に再録)
- (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編一』 東京：くろしお出版。
- 高橋太郎 (1979) 「連体動詞句と名詞のかかわりについての序説」『言語の研究』。(高橋太郎 (1994) に再録)
- (1994) 『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』 東京：むぎ書房。



- 伊土耕平 (2007) 「名詞修飾節の分類と体系」『岡山大学教育学部研究集録』135 (1), 9-16.
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』東京：ひつじ書房.
- 井島正博 (2021) 「同一名詞連体節のテンス」『日本語学論集』17, 1-12.
- 張典 (2019) 「連体節のテンスとアスペクト —主体動作客体変化動詞を中心に—」『日本語文化論叢』2, 51-63.
- 世良時子 (2020) 「タ形の連体節が予測させる意味」『日本語教育』177 (0), 92-100.
- 中須賀德行 (2003) 「日本語における連体修飾節」『岐阜大学留学生センター紀要 (2002)』, 13-21.
- 八木孝夫 (2016) 「日本語の名詞修飾節の分類について: 英語表現との対応から考える (上)」『英學論考』45, 57-86.
- (2017) 「日本語の名詞修飾節の分類について: 英語表現との対応から考える (下)」『英學論考』46, 59-79.
- 谷文詩 (2019) 「被修飾語の意味役割から見る日本語関係節の翻訳: 翻訳パターンとプリエディットルールの作成」『筑波日本語研究』23, 135-158.
- 徐幸華 (2021) 「日本語連体修飾節の中国語への翻訳法: 発話・思考・感情態度類の内容節における文分割法の様相」『叙説』48, 114-96.
- 山口登 (2000) 「選択体系機能理論の構図」小泉保 (編) 『言語研究における機能主義』くろしお出版, 3-47.
- 福田一雄 (2002) 「文法的メタファーとは何か: M. A. K. ハリデー (1994) 第10章をめぐって」『新潟大学英文学会誌』29, 35-54.
- 砂川由里子 (1988) 「引用句における場の二重性について」『日本語学』7 (9), 14-29.
- 龍城正明 (2008) 「日英語の過程型に関する考察: the Kyoto Grammar による日本語過程型分析」『同志社大学英語英文学研究』83, 69-98.
- 福田一雄 (2010) 「日本語繫辞構文の過程構成に関する覚え書き」『言語の普遍性と個別性』1, 3-19.